

『寂しい生活』

稲垣えみ子 著 東洋経済新報社 1,400円(本体)

「便利に人生を盗まれていた」生活を省みる

会員 長野 聡
(弁護士法第5条研修)



朝日新聞編集委員だったアフロヘアーの筆者が、自主退職され、福島第一原発事故をきっかけに電気をほぼ使わない(多分、携帯充電、パソコン、電球のみ)生活をつきつめて、家事を楽しみ、「便利に人生を盗まれていた」生活を自分の手に取り戻されていく過程が、ユーモアたっぷりに書かれている。笑って泣いて考えさせられる本である。冷蔵庫、洗濯機、温水器なくどうして暮らすか、読めば納得して、自らの暮らしを必ず省みることになる。

小生も32年の会社勤務から弁護士になって3か月、人口が減る社会での病理に関わることが多い。明治以来150年かかって3.5倍になった人口が同角度で急減していく過程が始まっている。登記放棄土地・死亡届未済登記・野生動物の活発化、都心の介護施設不足、1人暮らし女性の急増、認知症増加と相続紛争増加、外国人就労とトラブル増加、一方で、内需型企業の低収益、後継者難、廃業・合併増加、独禁法適用問題、アジア進出、ロボットやIT化に伴う契約類型の変貌。日本の経済社会は、坂の上の雲を追うのは終わり、成熟国として自らの生き方をどうするのか喫緊の課題である。弁護士として個別問題の解決に努力するのは勿論だが、個人個人とその集合体である国民がどういう暮らしをしていきたいか哲学が必要だと深く思うようになって10年。哲学者の所説や仏教ほか宗教者の本を多く読み、過疎の山村にも出かけたが、人中に住む都会の生活者としての実感と結びつけるには想像力を要した。

そこでこの本に出会った。東京の市井の自らの生活、普通の人の生活、実際の生活に深い思いを持ち、かつ楽しんで、実際に実践しておられるのが著者である。冷蔵庫なく洗濯機なくどうして暮らすのか、街全体を生きる場として、自然の風を利用して干物、漬物、裁縫、湯たんば、銭湯など戦前の普通の人に通じるが、全く同じでない自分の暮らしを実践しておられる。不便に戻るというのではなく、何を楽しみとして生きるかという原点の一つの姿がここにある。こういう消費者が増えれば消費者主権はすぐ実現するであろう。エネルギー問題、食品添加物問題、医療費問題、介護問題などの解決は普通の人の生活の中にあることがよくわかる。

誰もが彼女のような生活を送れるわけではない、という批判はありうる。健康など身体条件、文章で食べていける才能、家族関係など人により異なる。この本は、そういう生活をしようと呼び掛けているわけではない、淡々と面白く語られる彼女の生活ぶり、生き方は、自らの生活がこのままでいいのか、企業や公共のサービスはこれでいいのか、各種経済、規制の施策はこれでいいのか、根源的な問いを投げかけ、あらゆる社会の問題がなぜ起こっているのかを深く考えるヒントが満載である。生活からの視点は、社会問題について重々無尽の蓮華蔵世界が花開いたように見通しがよくなる。そうしてあらためて哲学書や宗教書を読めば、そのことだったかと頓悟がある。50歳を超した会員の方々に強く推薦したい。(平成30年5月27日記す)